

巻頭言

大学というところ、昔は「象牙の塔」と呼ばれ、浮世の波風から守られた別天地でありました。現実にはひどく疎いわたしなどでも不自由を感じずに研究を続けていられる、実にありがたい場所だった。告白いたしますが、今はない都立大に助手の職を得た25才（いい時代ですね）から2年間の海外出張を挟んで、助教授昇進の31才までの6年間、恥ずかしながら「カケンヒ」とは何の略語なのか知らず、ましてやその申請書類を書くことなどついぞないまま過ごしてしまいました。むろん出張したりする場合には、どなたかの科研費を使わせていただいていたのでしょけれど、そんなことをぜんぜん意識せずにいたのですから、なんてのんきだったか、われながらあきれてしまいます。

昨今はしかしすっかり様変わりして、三十年前ののどかな状況は「夢まぼろしのごとき」ものでしかありません。自己評価や外部評価をせせとやってCOEや委託研究などの外部資金を導入しないかぎり、教室予算は削られる一方ですから、研究をしたいのならば、科研費でも申請しておのおの自前の資金を調達してください、ということになる。

もつとも、採択してもらおうと思ったら申請書作成もけっこう大変です。それらしい研究計画・方法を年度ごとに「具体的かつ詳細に」記入しなくちゃいけない。正直言って、実験科学ならともかく、数学ではほとんどの場合、具体的研究計画なんて立てられません。どんな方法で解けるかわからないからこそその研究目標であるわけで（わかっていたら証明は実質的に終わっています）、そんなとき計画書を形式的に整えるのは、良心に忠実たんとする研究者にとってはかなりの苦痛です。ましてや、「エフォート率」なるわけのわからない数字を分担者全員に割り振るなんて、正気の沙汰とは思えない。この点昔は鷹揚で、「代数学の総合的研究を行う」式の一行だけの科研費申請が採択されたこともあったと申します（真偽のほどは保証しません）。—とにかく科研費申請書作成は昔と比べてずいぶん手間とストレスを伴う作業になりました。

申請が面倒になった一方、「ばらまきはよくない」ということで、科研費は単価を増やすかわり助成件数を押さえるという傾向にあります。結果として、相当程度の実績がありしかも整った書類が書ける研究者にはたっぷり資金が届くけれど、まだ実績が乏しかったり作文が苦手な若手中堅研究者には労多い割に金が来ない。本人の申請が採択されなくとも他の人からの資金分配を期待できるのは有力大学に所属している場合のこと、地方大学にいたりしたらそうは参りません。いきおい、出版点数

をかせいで見栄えのする申請書を書かなくてはと、論文の量産に精を出すことになる。これは研究への強力なインセンティブともいえるし、他方こせこせとせわしない、という気もいたします。

科学研究費助成に関する現行の原則は、厳正な書類審査により研究資金分配を公正透明にするとともに、計画の優劣に応じて援助額にメリハリを付け、実力のある研究者に資金を潤沢に与えよう、というものです。

こうした原則に正面から異を唱えるものはあまりありません。研究費は国民の税金から支払われているのだから、可能な限り効率よく使うべき、と主張されれば、ごもつともと頭を下げざるを得ない。それはそうなのですけれども、現実社会に100%の正論はありません。そう見えるものがあつたら、眉につばをたっぷりつけてみたほうがよろしい。かつて「大政翼賛会」なんていう組織が実在し、今でも論敵を売国奴呼ばわりしてはばからぬ雑誌が書店に並ぶ風土では考えにくいことですが、ユダヤの律法タルムードは、反対意見が出ず全員賛成の提案は、すべからず無効廃案とすべし、と規定しております。

というわけで、不謹慎といわれることを承知のうえ、あえてわたしは疑義を差し挟んでみたい。客観的基準による公正で善意に満ちた審査が、かえって非効率、不合理、不公平を生むことはないのか？ 挑戦的な物言いをするれば、「ばらまき」はいつも悪いのか？

たしかに以前のようなどんぶり勘定では、学術振興に繋がらないような助成の事例も相当数あつたのでしょう。しかし全体として眺めてみて、万事いい加減だった30年前より今の方式が本当によいか、と考え出すと、然りと答えるのをためらってしまうのです。たとえていうならば、5%もの無駄を出しているのはけしからん、と査定を厳しくしたら、その作業に7%相当のエネルギーを消費してしまった — そんなむなしさを感じ。もしくは、談合を完全に排除して大真面目に各審査員が順位付けしたあげく、あるところには金が集中しすぎて使いきるのに四苦八苦している — といった馬鹿馬鹿しいイメージ。

みんながそうとは申しませんが、わたしが若かったとしたら、審査手続きが簡単で用途制限が緩やかな50万円のほうが、手続きが面倒でいろいろと制限のついた300万円よりありがたい。「重点的競争的資金」はもちろん重要です。しかし純粋数学のようなつましい学問では、それに平行して重点からこぼれ落ちたものに対する「広く薄くおおらかな」資金も増えてほしいな、とつくづく思うこのごろです。

宮岡洋一 東京大学数理科学研究科